

Centimetres

Kodak
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

繪本梅花冰裂



13
1905
2



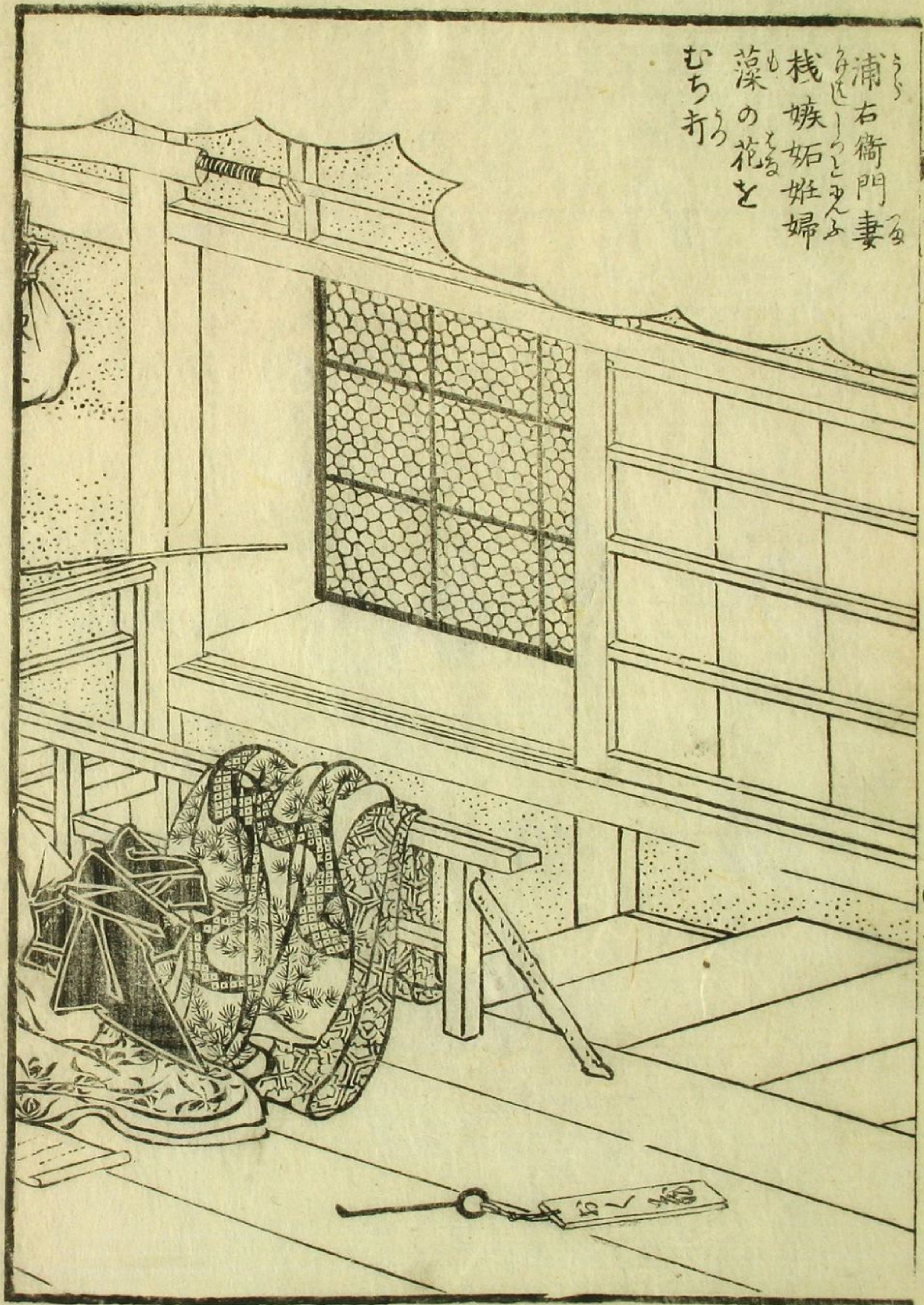
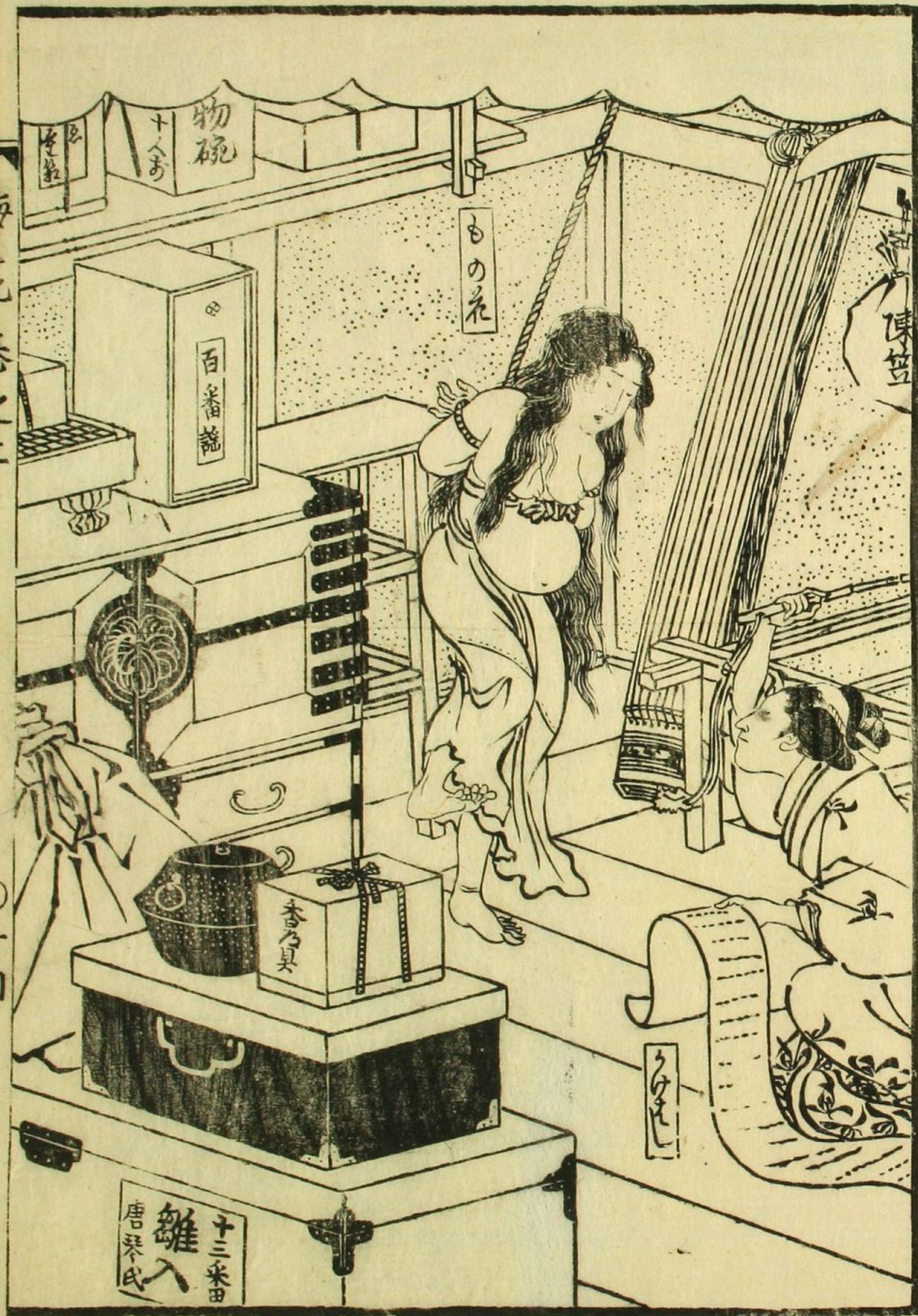
1303
2



婦人を妻にして一生のたのけと恋慕の情(保)とども
 人を懸想とる道にあらずとて心とを返めてそれまむ
 打過しが浦石防門妻と心を合せて本妻の身と害せんとする
 人の道にあらずと落花心あれども流水情あけしといふ人もまむ
 道にあらずと夫とをて某が誠心とけあめあふ心はあれ若
 某一命おけても身身の命をまむいふやいと中とひけ
 棧へ唯はるのひねてあはしゆ人もせざりけり藁文太その体とてひ
 けり返答ある其が心庭を疑ふのまあるん武士のまあるん
 小かんとひひつ両腰をさうて已小まんちやうせんときと棧あはく押留
 すが待てはるくみひまづ浦石防門已小夫たりの道と失へ妻も
 又妻の道とやうとておの心よまがれとて妻一命とをさう

かに計とけしあられじとつひつやう怒の色とあはて笑顔をつくし
 は処不ひぬしうる家内の者のあやむまゆゆん今夜家内の者の熟
 睡の時とうがひ妻の寝所へあのかせやんその時の相番へやうくとあは
 合せつひつひめて我家あつこととまぬ顔して居るうとけつとつてその
 夜深更おぢひて蓑文太と庭つらひふ志のせは夜を始して折く
 密会をほけつが家内の者の露やぶもられとあるまぢちうけつ棧へ
 年已ふ三十と越て女の盛と過たりといつても蓑文太のつづぶ二十一才
 の若人あてたがひすれやう美男ちう殊更都小於て為人風流花月
 の奥妙とまのめたる男やぬへ浦右衛門が武辺形気のものめたるふ
 比ぬ尾と捨て玉と抱おひひとほ日來たうもの心も烈火ふあふ
 蟻のぞくとろりけて水のうはとつてひぬ是乃蓑文太前浦右衛門

棧小對一子をまううるなめ妻をゆめかんとつひつる物語と垣一重外
 して広く閑そのち浦右衛門が家内の様子とよくうめひあつといふ
 志そり浦右衛門が手跡とゆめ鎌倉小すゆじと閑偽筆の書簡と
 あつめあさつひ小棧とあぢむさつるやうり浦右衛門の能書あて尋常
 の人の為がた手跡あるれども蓑文太のなまきりつる能書あてまも偽
 筆小妙を得たぬの思慮あきれた女のおぢむめ世もうべわたりけり
 〇凡婦すいおぢる水性のりあて万喜ふうりつる安く慮浅くして人あさ
 びうきこと速あつてまも善ふうりつるうめ悪ふとあること安
 七人の子とあることとゆめ女ふ心をゆめとあること常言理あつかな
 唯おそるべぬの婦人の心あつてさうぬだふ女の五障三従の罪あつたと
 仏もらぬと戒めあつてよく貞烈の婦の行を学びておのれを修む

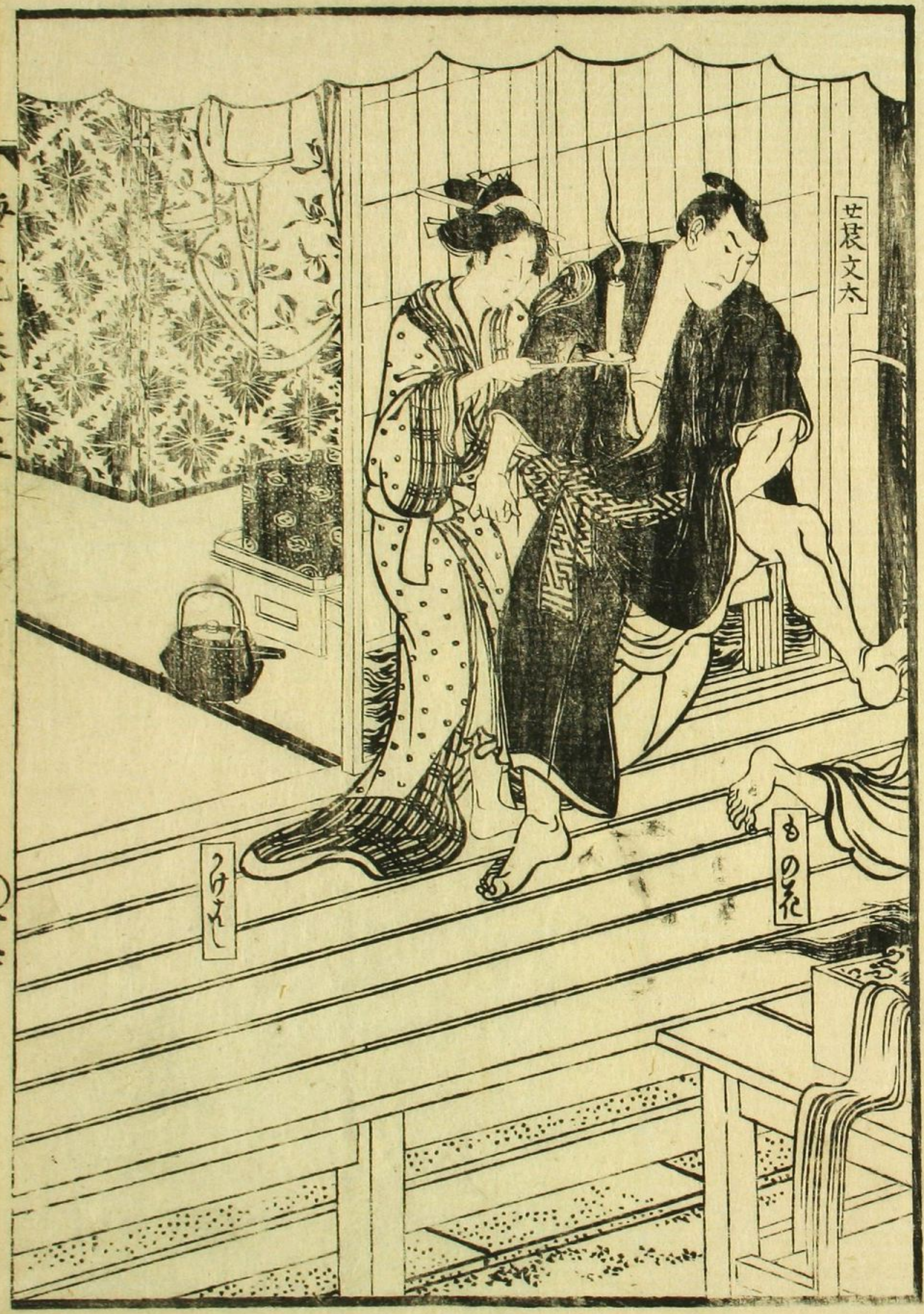


不審なれどとれぬ御主人の御手跡と又ゆきどもかる密唇と
 おろそめつれいそれはしらぬ偽筆ふゆるといせもさてどいなく我
 年ひほくつれとふ夫の手跡と又たづることのあざけらぬ汝とてと
 のひら手中と藻の花が口小押らとてものいそとて衣服とをさて裸
 とし荒縄をひて高手小手ふらとあけ梁ふつしてありとあふ
 竹の鞭を把面上身上の差別なく力をさめて打けしは憐じは藻
 の花の五の顔たちまち小腫あがると顔も頬もたぐさじいで秋波の
 目ゆきのあやしめ目の玉飛出ておそろげやうり口ふゆのこもる多せ
 られたるはあはれさけぶととふあはれと眉小くはれ黒髪をさく涙は
 五月雨の軒の霰小異あはれと白肌の皮やがれて濃くぬるるの血は
 ちよし紅葉小おけり朝霜の今も消ぶさありさぬやう棧ひけは我

若汝等小毒殺せしむるべいそともの苦しせんやその報あるべ汝も
 あくまを苦痛とさせ食らめとて途殺あもちあてこふありてうひ
 死せよとのひる深より引おほの返めの縄のほを手摺ふとと
 ひつけおとて出たけり
 第三齣 怨魂 看金魚
 かくて三日を過けしは藻の花の小飢ふつれとて縄雪の肌ふり
 こく腕あびれてのそとたへく殊小懐妊して巳小八月小ありと才あり
 ば腹ハ大鞆のごとくちろとて唯よりの小とらうて、死もやど活もやど
 ぞうめれ苦む為体恰も三悪道の衆生のごとく返めの縄へ毒
 蛇小牙をまといるふ異あはれと飢ふつれと吐息の餓鬼の火火小
 さも似たり棧のそれふひたてて毎夜蓑文太と密会し雞を恨る

卯酒小鍋のあげも雲とちりて物糞音も雨とちりて丘小笑ひさう
 めねて赤いしまちるるまひちり彼かれの苦くるも是これの楽たのしみも彼かれと是これと依
 々よぶる藻の花もと不便ふびんあり藻の花もあつこの苦くるも是これと依
 可よとめくけど幸さいわいの返かへめの繩なはの区まはとけりるあぞ腕うでへくも
 片息ひといきあて土藏つちぐらの二階ふたひをくると外あはのくまらび出いてうかぶ夜よ
 ちんぐと更さらりると家内うち熟睡じゆくの体てい有ある心こころうけく戯場けがの幽霊ゆうれいの如ごと
 浪なみと踏ふくと出いての金魚槽きんぎよざうの辺へ近ちかづきせめて咽のどとらうして
 逃にげ出いるとあひや庭木にわぎの枝えだひたけして口くちもめたる手て中なかとさけり
 金魚槽きんぎよざうの水みづを一口ひとくちの吻くちと息いきひつきておぢえと声こゑたてあま
 しくとさけびけりぐその色いろ棧せきが寝所ねどころをえ折をりる蓑かさ文ぶん太た棧せき小目こめの
 居ゐて棧せきとともふりのひやくとこの体ていをえのけ手て燭しやくを照てして西

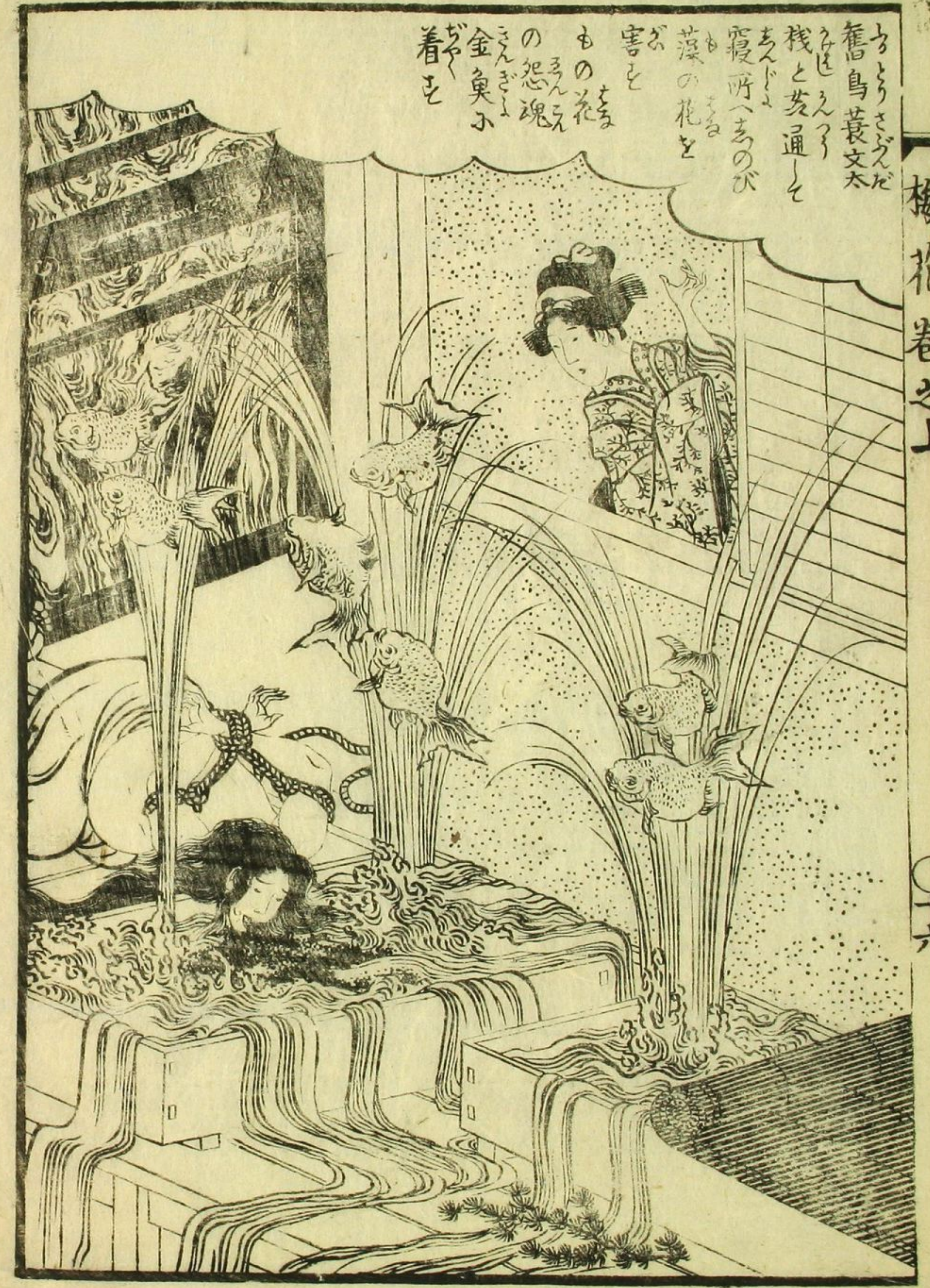
人ひととも小走こそう出い棧せき藻もの花はなとありいつけやくと女おんな誰たれがゆるしとらけ
 ば所ところ一ひと出いるを汝かえり逃走たうそうらん覚悟かくごありぬとのまぬが蓑かさ文ぶん太た棧せき小目こめの
 ちて小色こいろふるむり片かたつけて志こころあふ志こころじとひつて足あしをあげ藻も
 の花はなが横腹よこはらとあふふ踏ふたりとけぬ嗚呼ああ痛哉いたさうなたちまち横腹よこはら破やぶれ
 て破目やぶめより血ちみ漆しつを生なと出いる男子おんこと又またえい月つきいたるむと
 五輪ごりん尽つく具ぐりて唯目ただめとあふるの之これ胞衣ほういの緒いとを口くちふらへてなむひ
 少すこぶ色いろを一ひと色いろあげつるが棧せきのこれを見てまじく妬ねたのおりひ胸むねあふ
 此情このなさけありもそのこころと子こをそと人咽ひとのどをきめて殺ころしけり誠まこと是これ悪あく
 鬼おに小こもまらぬる所行あつまひあり藻もの花はなの呀あと一声ひとこゑさけび血ちを吐たてその
 息いきの絶果たえりけりて藻もの花はなが吐たたり血ち金魚槽きんぎよざうのうちみ流ながり入いて水みづ
 小はじりと又またえしがたちまち一陳いちぢんの冷風れいふうとかき来て庭木にわぎの梢こゝろを吹ふき



世枝文太

もの花

つゆ



ちとらさぐんた
 舊鳥菘文太
 むじえつ
 棧と茨通しと
 ちどよ
 寝所へあのか
 も
 藻の花と
 害と
 もの花
 の怨魂
 せんぎ
 金魚ふ
 着と

梅花卷之五

十六

水槽の水がわくこちうさうざに怪哉藻の花が吐たる血あふこの金魚
 の赤いあまこちみ斑の江魚もどて人血の色も変ト一志不濃江の色と
 ちうと眼をいらげ頬をあくし腹いたくはさして姓婦の腹のごとくふ
 ちうと尾をいらげ乱してさしすふ打つあつて憤怒の勢をば狂ひめづりて
 水と吐形勢おそしむるもいふべしと正是藻の花が怨魂金魚も
 還着したる不疑はしこれ後の世ふその種をつゝへて獅子と称し或は
 乱中と稱してりてあそぶ一種の金魚られし始りけりとかやさじが
 の棧もろの体をとて身上ごとと冷とちうと毛髪さじまふたちけるが
 葦文太の強悪して膽みとけむさうで驚けしものなく手も争く水槽
 小篁を打ちおむひ藻の花母子の屍を床の下小踢とて棧が手と把
 てゆとの一回小ゆりてさうやまてひひけら宿世の深き縁あつたゆ

浅うらぬちざりてむもびたひの誠心あつりれてるひとも多うがたし
 濡ぬされこそ露をもゆらぬけむむしうらんがをつれのこて我妻と
 借老同穴のちざりてはてん珠小藻の花母子を殺したるべし争く
 以家と避る小志は家内の者の志ざりて幸やう今夜のうらちふ
 逃出んおん才の心底いふとの棧各けりい妻もさうふ志うらひを
 るちうとおん才の妻とやうあつたといひ猛火のうら深淵の底まを
 もとの小西うら片時もち争くもあひまゆりれとのあぞ葦文太は
 その心底過分なり浦右衛門がたぐりの金子あはんのこちと夫を
 取出しゆべのこちとさけは鎗藤四郎の刀を所持するはすまのあ時
 小賣代をせが高金小なる宝刀をぬがそれも奪ゆさあをいふ
 棧うらなづれたる人の金三百両をうらとあつてけりて取出し財布ふ

一に肌ふつけの刀ももさりとて山登して葦文太不渡一手ぢくの衣服と
 一包とほてたづきん庭づゝひ不忍出て葦文太が宅までよく身変度
 一つひふ西人打連てびくともわしく逃失ぬるめく棧葦文太と密
 会を仕そめてうらう婢女もが少の更を越度して皆いとめとつ
 へ家内あひ只厨と管る耳志の婆一人十二才の少女一人との
 よぬが
 余奴僕三四人あしどもこれ等り奥へ出入せざればとて棧葦文
 太と密会の更の勿論藻の花どの返めあそころ更も露あふどた
 び夜中少女不助ふくともめりのげよし始終の様子をえとけつ
 とど初その翌朝ふらうとて藻の花母子の死骸をえつけ棧葦
 文太と出奔一りの失る体をえて一同おちおちありどもいつ
 ぐりく小串の館ふらうと浦右馬門の第唐琴滝次郎といふ者不告

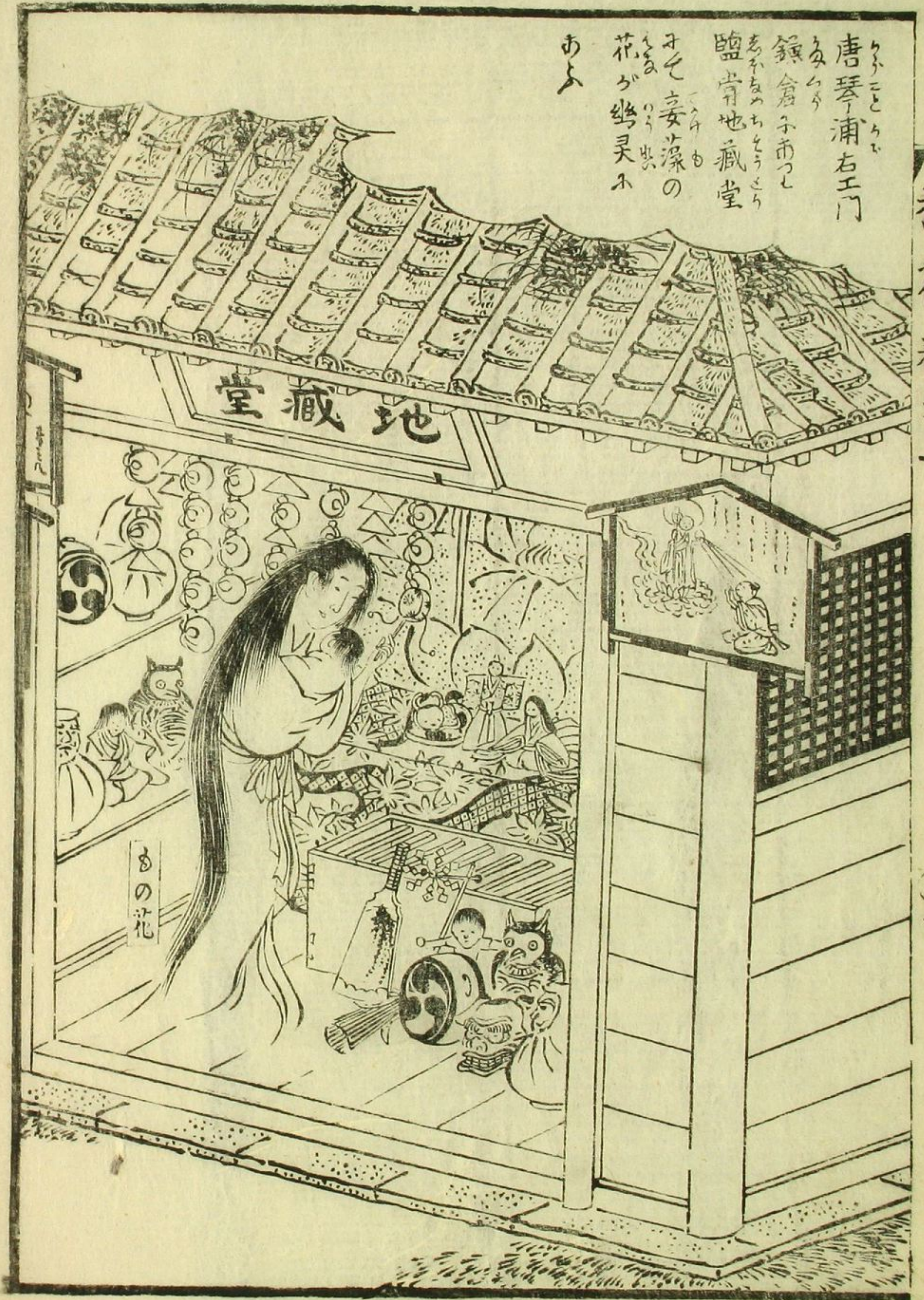
あしせけしは滝次郎仰天一袖助といふ僕を具一早馬あて浦右馬
 門が宅小来りぬ此滝次郎といふ今年十五才たぐひまるなる美少年
 をぬがのやぎを角あて小扈従をつとめ上館小住ぬさて滝次郎藻
 の花母子の死骸の為体棧が寝所のさる金魚の異形小姿にたつ
 様子をして益おどろきかの小女とよびてその夜の更とてあふ
 同乳一執権職小縣何某のゆえ告げとて上館より一人の武士来り
 死と點檢して立飯をさて藻の花が亡骸の古手屋三郎をよびて相
 渡しみどり子のあはれつらひ菩提所へ送らうとて葬つて滝次郎未
 細と昏状ふたすめ僕袖助小持しめて鎌倉小あふ兄浦右馬門の
 方へつらぬ執権職よりしよは更の始終をくくめきまじし飛脚を
 鎌倉ふつらして主君自行小告たりけり

○第四 詞

遇二妾一婦 幽一靈一

さても浦右衛門の鎌倉扇が谷の旅館ふありて家内ふ凶変ありと
 夢ふもあふむ日この勤仕おこさるる一日少しのいと多と又合せ供
 どもつねを只一人忍姿あて館を立出まふ鶴が岡の社を伏拜六
 浦金沢の辺を逍遙と權勢結を慰めぬ頃しも初秋の時あて
 吹そゆる秋風礮の松が根不波打かけ今より海士の袂もあを
 そくそく秋風あて秋のたる花萩の音露けさ野辺を踏分つとち
 ちちを遊覧見一空飛雁とあふめて古郷の便とさるる草
 葉の虫の音を同ていとさるる涙そこわれける紅葉舞風菘暮景
 敗荷散水過残香とのふ句もふひひとされてるふあうさる好景と
 おえと時をうり秋の日の短さあふひ巴不日もくれねんとさるれば

いそが飯路ふのぞくと鹽嘗地藏の堂前を過るけり水子塚と石面
 不ありつげと建たうとえて立とるる泡沫无常の世のなるとひ老少
 不定の剣さひひちちたかく人身をうけわたりふ世の風もあふむ
 胎内かて死せる水子の多けとて此塚のわかくまもあふむ
 歎息してつとふふまらり常念仏の声きて心小愁と生じ堂
 中とつらうらぬ鳩の車竹馬鉄離伽婢子羽子板ぶりく毬打風車
 悲鼓鼓のたぐひ知子のりとおそび物を地藏菩薩の前ふ山のごとく
 つつかたぬたりがまらるる香の烟ふふとらぬ堂外ふ疱瘡あて死せ
 子の病中の体臨終のさぬ或ハ賽の河原の為体などを絵ふる
 文字不記してゆ枝とあふりけりなつ線香のふふひ梅の香あ
 て是无常を現ぶるあふらるる浦右衛門まじく後と催て



「柳」

心のうちふるひける焼野のまきと夜の雀鳥類畜類ふゆるまて子の
 恩を友など切ちるる人の親の心の闇ふあふれぬの子とて道迷
 いらぬものごとくさるる物を仏子供養して冥福をねがふと我
 人の親ありとて世の中の親の心を推量さぬべし理と
 ろく我宿願をさげて妻腹ふ一子をさす方とて胎内を
 死とてまゝの出生して早世たるその時わいうと悲かんと死
 びしてあまきつとひとて一古郷の妻をさひて去りて
 居る入相の鐘耳ふひぬぐの鳥のちれ渡るふ打撃武辺
 と心づくる者女にしさるひふ屈さるる我あがらじさよとぬも子
 女迷ひぞとさひちして立ちふんとさる所も堂中ふ女の声
 のよめふふふふふふのふらと子ふつとて乳母のふくふと

山越て里おくと子とあぐさるる声の耳有れなむとふと
 轉へて思ふ堂中の暗所ふ志るれもの身ふすひたる女
 子と懐ふ抱て仏の前なる木魚を打鈴とあはして餘念なく子とあ
 そがとる体なり浦右馬門眼をさめてよとぬ黒髪を肩ふ
 瘦衰たるさぬあれも妾の藻の花不疑あけし大お中ことば
 とめんとちうづひ多ふの女地獄の背後ふめれぬ浦右馬門
 らく藻の花がさふさるるべれいそれ我古郷の妻をさひて
 迷て似る女と藻の花と又た人ほらめとさひついで歩を移
 折し由の方より飛脚とおぼし者飛がごとくふを来つと浦右馬門
 が前ふひがなづ浦右馬門これとさるふ弟滝次郎が僕袖助を
 大おのぶると汝何ゆゑ当地ふ来りしとつば袖助大息つとてひける

見国元みくにのくにより火急ひきまの御用ごようふつと夜よを日ひ不續つぎてまぬけし所ところけし由よし金沢かねざわの
 迎むかへん出であるはとくけた多おほなりおん然しかを慕あこひてこれこれををりありゆわると
 られを御ご覽らんふされしとて首くびふかけら杖箱つゑばこをさるとは出でて浦右うらご
 勝門かちかどのそとく各あ枚まいをさると出でして用ひえう不た淹た次じ郎らうがりとしてして棧せき蓑さ
 文太ぶんたと共とも通つうして藻もの花はな母子ぼしを害がしたくりの金子かねこ花はな不ふ鎬ごう藤とう四し
 郎らうの刀たを奪うばて兩人ふたりとも不な逃た失しる事こと支しあふび藻もの花はなが怨をん魂こん還げん着ちやく
 して金かね魚ぎよの異い形ぎやう不ふ変へんじる事こと支しあふびと註ちゆう進しんの文ぶん言げんあり浦右うらご
 勝門かちかどあされをさるば詞ことばもあるとけりある時ときも家け来らい警さ察さつ教けう右ご勝門かちかど
 あれをさるばを来きて相あ公こうより急きゆうの御内命ごないめいありとて御同輩ごどうばい植科ちけ
 氏うぢお出であるとしてとくおんをさるば浦右勝門うらごかちかどもさるばとく
 各あ枚まいを懐いだして教けう右勝門ごごかちかど袖助そですけ兩人ふたりを具ぐしてとて旅館たびやんふりけり

つて浦右勝門うらごかちかど私宅しやくたくおつりけぬ植科ちけ何某なにがし待まちり居ゐて主君しゆきん貞行ていぎやうの
 内命ないめいありとていひけり今日けふおん国元くにのくにより註ちゆう進しんあり和殿わだんの妻めかけ棧せき
 隣家りんがの者ものと共とも通つうして妻めかけを害がし鎬藤ごうとう四郎しらうの刀たを奪うばて逃た失しるは
 武士道ぶしだうならつてつるべぬば一旦いつぱんいとなをぬぐひ妻敵めがたみを打うちてつるは
 命いのちわりその旨あねさるえゆといひ渡わたしてとてつりけりこれより浦右うらご
 勝門かちかど俄あふいと女の願ねがひをせしけり早速さつそく不ふ許しよ容ようありけぬ望朝もちあ未み
 明あみ教けう右勝門ごごかちかど袖助そですけを具ぐして鎌倉かまくらを發はつ足あし旅中りやくちゆうといとてとて
 なく信濃国しんのうくにおつりつとて我家わがやおつりて家内うちないをあらためさせ金魚かねぎよ
 槽ぐらを足あすばあ多おほくの金魚かねぎよをさると異形いぎやう不ふ変へん浦右勝門うらごかちかどが顔かほの水みづ
 うつる所ところお頭あたまをさるへて游あさあつる多おほく体恨ていこんをさるへ怒いかれを告つぐさる
 ちぬば浦右勝門うらごかちかど且かつ悲かなし且かつ怒いかれおの女をんな夫おとこ淫婦いんぷものたると天てん不ふ道だう

ありてのちち地小門ありてつらうともたぐぬゆを仇とむらふあり
 居るといひつて拳とあざりと牙とめくちるしけらせめてめり母子が
 菩提の為と一七日が間施餓鬼を修行し切の金魚を尽く佐久
 郡長泉寺とふ寺の池に放ちぬのちくの絶海禪師の教解する
 て深の花が靈魂成仏得脱しなれども後世の衆生も因果の道理と
 示と為とて異形の金魚はその供におくれけらふより今もつて乱中
 の金魚を長泉種といひけりとも朝鮮二作と浦右衛門家財ととり
 おさら婢女奴僕等ふいと多をつらし弟滝次郎おくれを告旅の姿お
 打扮て数右衛門一人を具し蓑文太様がおくれとたぐぬふいせけり
 とぞ

○第五 齣

笛吹雨醸災

その頃泉州堺小栗野十郎左衛門といふ武士の浪人ありけりその
 出才とよ守小元来雲州の刺史塩谷判官孝貞の家臣柏木六郎
 とふ者の子たりたる暦应年間執事師直孝貞が妻と交想
 しその意不従ざるを怒て孝貞と説き孝貞つひ小本國雲州に去
 佐布山お於て自害とそその日則暦应三年四月朔日なりその時始
 木六郎も殉死ととげぬれ十郎左衛門十二才の時を今ハ已ふ齡初老ふ
 過ぬその妻と沖津といひ一子と長吉といひて今年十才を至りけり然
 頃百十郎左衛門さういふ事ありて信濃國平手権逗留し居たりけり夫ハ
 切かき蓑文太の棧をつれて出奔し当分木曾山の古社のうちふく
 じ住めぬてあはれ当國の悪淫どもとたのし浦右衛門が家内の動靜
 とうづのせけら浦右衛門の事を願て鎌倉よりつらし妻敵おふ

出るはよと旅よとあひとさるのうと同藁丈太心中ふるまうを發
 足の日を待たけとさて浦右衛門の藁丈太棧苜當国のうちよる
 夢もあふとまじ東の國をたらぬとるひ已不旅の用意とく
 のひけとぶ教右衛門一人を具してまど夜うたふ發足しける折しも
 雨うし出い道くうけとばふらう小提灯をさげて笛吹峠にたつる
 教右衛門の旅の具のうちふ取落したる物ありとをあまへ立ちぬ浦右
 衛門也我と我才とつりうらば腫中草鞋ふ半合羽ふるもぶせに
 打扮り平日の旅やふ馬の駕籠のと大勢の從者と領しと出
 らたふつりてとて此姿養畜友ふ手とつりて武士の面をけせ
 ことるふくくちとさると心のうちふあのが才の薄命と歎息矢猛心
 由より合羽の袖と提灯ふおひて雨と凌ぎ田と坂の半とよと

けふものかげよと雨人の曲者つとはら玉ののともいもど刀と抜と切
 ほけたり浦右衛門いそがしく才と轉しと雨人の刀とさる拍子小提
 灯のさるびきえてまら真の闇とあり暗冥とて一寸さるも
 えつらと浦右衛門声たう汝等ハ山賊の仕やひ一目ふのえせん
 とよびひつ刀ととらると抜放せばつら曲者雨人もさつら挿
 へと斬つけたり浦右衛門の曾て劍法を熟練しとも早業の達
 人あり雨人の刀と右左ふうけちる阿吽の呼吸を心あてふれひ
 よんその志とつらととて丁と斬すもく猛雨のうち泥水が
 踢立つ勢たけとぞ戦けるめて雨人の曲者つひ敵とるとあ
 りと一人の頼額ニふ斬つれて呀ときけいともなく地上ふ倒れ
 て息たえぬ一人の腰車ふ斬をぬさと二段ふつりて倒けり

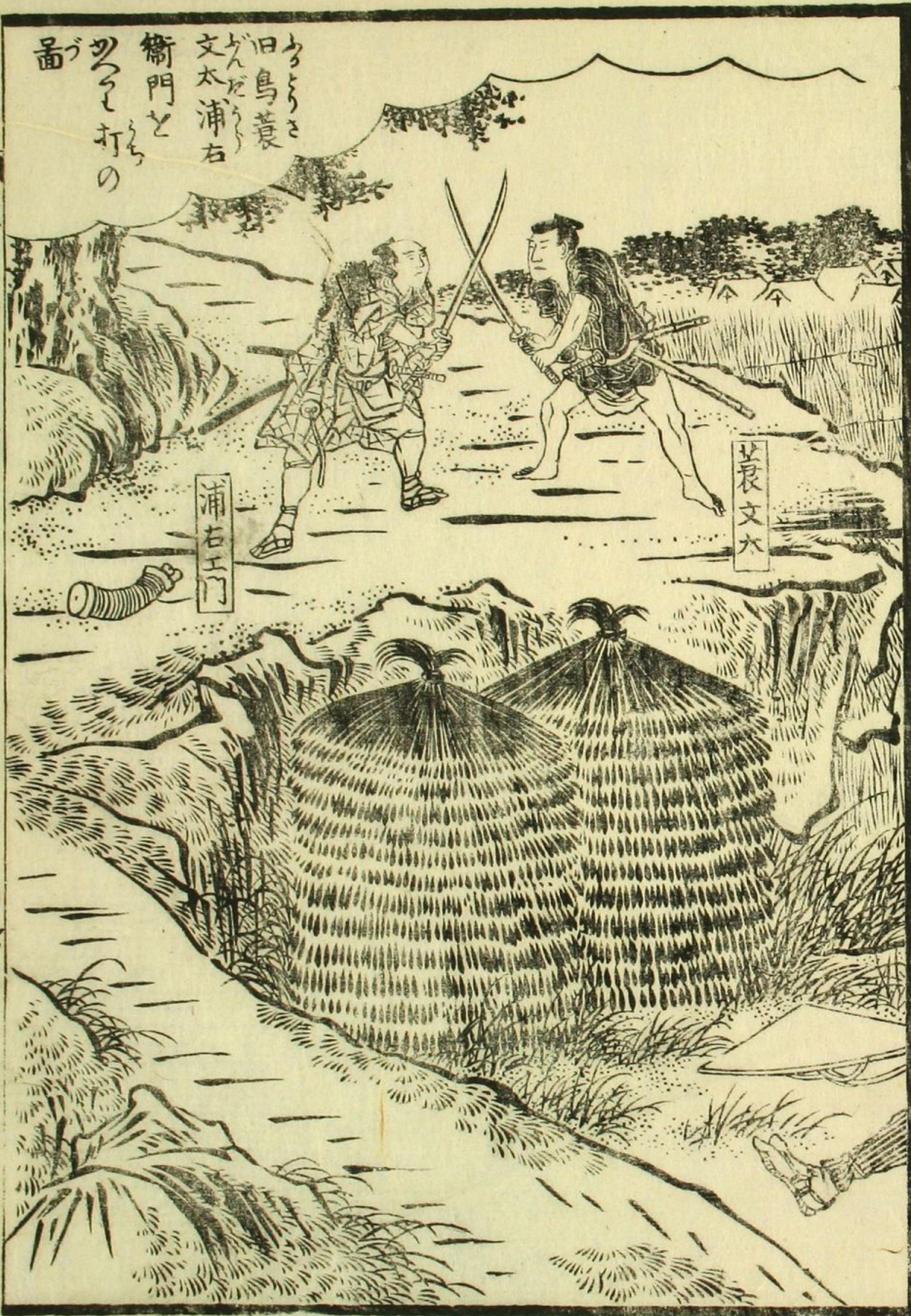
浪人 栗野 十郎
左衛門
鷲森 教
右工門と打



十郎左工門

右工門

旧鳥養
文太浦右
衛門と
打の
番



文太浦右

浦右工門

七六

浦右衛門 吻と一息つきたる折しも 稻村のぬげより 又一人の曲者 刀を抜て
 ぞどり出浦右衛門が 背後より たぬ打小肩 矢とまゝくふさうつけたり
 浦右衛門 手とおひちかぐり 身をひるつて 刃の者をまじつるぬば 是乃舊
 鳥 蓑文太あり 蓑文太たむ つけて 又斬つけたるが 浦右衛門 運の尽
 あや 泥小足をふくまじて その太刀をうけ 損トある 不太驍をまゝくふ
 まゝしとて 浦右衛門 両所の深手を おひくと 心ひひり 身を膝行
 しつめりさざり みる刀を 蓑文太あり ぬひのて 逃走の 体をはり
 たの松の木 のうふつけの 布を様子をうぬひけり 浦右衛門 声高
 旧鳥 蓑文太たぬ 打小手を おりせ 逃合ひ 比真あり ぬせりせと
 きども 驍の深手 小足たむ びとさうよ ぬるをさちり ぬる 昔しも
 教右衛門 とうとおどつる 物をたぐさうて 主人小追つん 心せたりとぞ

くをせ来り けがめの 栗野十郎 左衛門 此夜何等の 用ありけり
 迎ちきさ 山寺小由さ 夜とふして ぬり 道ゆくさ ぬげ 木履とをさ
 て 横道より 此所へ 来ぬらし けがむ ぬのけ 来る 教右衛門 と丁ど
 ぬれおひ 十郎 左衛門 声たぐらぬ 栗野十郎 左衛門 たり 我ら
 ぬが心小 おおえ あらんぬ ぬひとる じとよ ぬるさう 明晃々たる 刀を 抜て 飛
 ぬらし 教右衛門 が 肩 矢と 乳の下まを 左り 袈裟小を ぬと ぬと 斬さげ
 たぬ 牙とさ ぬばぬぬ ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ
 十 余歳と 一期と して 旅の 姿と その 終小 死出の 山路 おも ぬぬぬ 十郎 左衛門 何
 の 遺恨ありて 教右衛門 を 打ける ぬぬぬ ぬぬぬ ぬぬぬ ぬぬぬ ぬぬぬ ぬぬぬ
 鼓の音 大ふ びとを 教千騎 の おめ ぬさ ぬば ぬ声 ちぬと ぬぬぬ 是 何事
 ぬぬぬ ぬぬぬ ぬぬぬ ぬぬぬ ぬぬぬ ぬぬぬ ぬぬぬ ぬぬぬ ぬぬぬ ぬぬぬ

直常賄ひて上野ふらりと義将の大軍追打せんと此所を通り
 己小義将の大軍数千の明松をうけては潮のあつたごとく此所
 おり来りけり十郎左衛門の教右衛門が首をとるいとあつたを
 ごとくして立ちぬ義文太のいそぐしく松の木を飛せりて逃り浦右衛
 門の深手をかひて走ることあつたを憐れむ数千の人馬踏つけられ
 泥中死しおらんぬ衣を穿るさすの果ありとせり浦右衛門ふちとる
 人の者の義文太ふたのゆめたる悪浪等なりとむおも其首義文太へ
 小木曾山の古社ふ立ちつとてげればいふ棧の柱ふくつて
 られて居りけり大ふおどろけり繩をととていつちるあまごと
 ちのぬれが棧なりといひけり宵のむとおん月の出行むひつる跡ふ
 影がちめて眼ざしおどろく山賊ともおぼさる者さるるま

て柱ふひつけの三百兩の金と鎗藤四郎の刀をさび出して奪太
 ちつといふ義文太られと困てまじくおどろくといふものよとて
 るどちたぬれがちおとせんあとおふぶき便もあつて只奉りお
 とりあじて怒りのこもり是乃漸く小悪報のりつとて一端
 あつたたりきれども浦右衛門とつておちまてぬれがれの道も
 国小長居のちとほひ小棧をつれて東あつた山つてひいて
 越後の方へ逃れぬとてその翌朝里人等浦右衛門教右衛門共
 人の悪浪等が屍をえりて小串の館に註進しけり小串の家
 臣来りて屍を點檢しその夜猪道小屋に居り里人等とて
 たぐぬけり小坂の上までへ旧鳥義文太の首をとりてえ坂
 の下まで栗野十郎左衛門と名告りて人をたたり様子

雨といひ暗夜なればかみくみそくけと命をどとのいふを切ら
こころ鬼あくるら 栗野十郎左衛門といふ者どつとひちのれは清石
うら 防門をとり打也十郎左衛門あ 兼右衛門あ といふ世にみづのぬり
ひら のいふ評議一決しけるといふ

梅花氷裂上冊終

